

平成二十八年万燈万華会

星野史子

今から千二百年前の昔、西紀八三二年、空海は紀伊半島の高野の地を我最期の地と定め、八葉に囲まれたる台座の地を光と花にて満たし、万燈万華会を奉修せられたり。「恭んで聞く、黒暗は生死の源、遍照は円寂の本なり」とはその願文の冒頭なり。その光景 現

代を生くる我らには古の自然の厳しさ、闇の深ささへ想像だに困難なりしが、魑魅魍魎

たる奥深い地に闇迫りくる中、油染みし紙^{こより}縫燃え、幽かに浮かびあがる花々、あたり一面満ちゆく仄かな光、こは生ける證なりや、はたまた彼岸なりや。まさにさは命にあらずしてなにものにもありなん。

而して、その花をいけ合掌する供華儀式は今も東京高輪の高野山東京別院に於いて、毎年厳修さる。本年十月二十二日、夕日落ち空闇に沈み境内の燈籠一斉に燈され、本堂も参道も光に満ち、花々益々生き生きと輝けり。本堂脇には、これから始まる行列の識衆集ふ。正装の僧侶数十人を先頭に、赤き大傘の下には高野山真言宗中西啓寶管長猊下、東京別院鈴木英全主監、稚児大師様等、次に揃いの赤き袴にちはや（巫女装束）を纏ひし華道高野山の献花従者が續くなり。一旦寺の外を巡り、正門より境内に入場。両側を埋めつくす人垣の中、チリンチリンと鈴音高く響き、ご詠歌流れ、参道の光に導かるる長き行列は本堂正面へと進みぬ。僧侶により散華撒かれ清められたる道を踏みしめ、

莫^ご塵^ごを持つ者、花台を持つ者、花器、紅白の菊を載せたる花盆、水差台、水差、皆胸より高く掲げて各々對になりて進むなり。我がその列の後に控えたるは、今回総司の役を務むる故にて、紅白の菊を插花する二人のうちの一人なり。本堂中央の赤き毛氈の上、順次道具揃ひたれば、我は献花座正面に着座。華道高野山華務長山縣弘俊先生、華務職高橋恵美子先生に見守られ、内陣にて理趣経読経せられて境内に響き渡る中、我、懐紙のマスクにて口を覆ひ、白菊七本を一本ずつ「格花・眞中の行」の花態にていけたり。眞とは眞・行・草の三態のうち最も厳肅なる姿であり静態なり。その形まつすぐ上に伸び七本の菊をば一本の花留め以て止めねばならぬ。緊張の極み、半年間の練習の成果はいかに。今朝方出掛けに緊張せる我にかけたる「心でいけるがよし」との夫の言葉を思ひ出し、一本の菊に我が家族の安寧を願ひこめ、この荣誉ある役割に感謝を込めていけ

上げたり。花器の正面を本堂に回し向け、承^{じょうじ}仕（御本尊様のお手がわり）に花を託せる折、我が胸に込み上ぐるものあり。安堵の為ならんか身体の軽ろくなりたる感覚を覚ゆ。気付けば我誰よりも先に覚え合掌してありけり。本堂は煌々とLEDライトの照明に照らされ、着物に結たる錦糸の帯はキラキラと光り、映像はライブにて境内各所のテレビに映し出されたり。この目も眩むほどの明るさは1200年前の古の光とは全く異なる

ものなれど、お大師様が厳修されし四恩報答の願ひは、ここに集ひし人々の心中に脈々と流れ、弘法大師様への思慕と我ら衆生自らが救われんことへの祈りは今も未来も変わる事なからん。